三二八〇番

我が背子は　待てど来まさず　天の原　振り放け
見れば　ぬばたまの　夜もふけにけり　さ夜ふけ
て　あらしの吹けば　立ち待てる　我が衣手に
降る雪は　凍り渡りぬ　今更に　君来まさめや
さな葛　後も逢はむと　慰むる　心を持ちて
ま袖もち　床打ち払ひ　現には　君には逢はず
夢にだに　逢ふと見えこそ　天の足り夜を